

黒トリュフ人工栽培 2年連続 成功

高まるニーズ 安定性向上図る

県森林研究所 12個確認



黒トリュフが発生したコナラの木を前に土壌について説明する水谷和人さん(美濃市)

国産黒トリュフの人工栽培に昨年、国内で初めて成功した県森林研究所(美濃市曾代)は5日、2年連続の栽培に成功したと発表。農林水産省に委託されたプロジェクトの一環として2015年から始まり、安定的な栽培を目指して研究が続いてい

る。

世界三大珍味の一つとしてフランス料理などで珍重されるトリュフは、栽培が



土から顔を出したトリュフ(同)

極めて難しく、国内で流通しているものは全て海外産。国内での安定栽培のニーズが高まっている。

トリュフは生きた樹木の根に共生する「菌根菌」。その性質を利用し、コナラの苗木の根を、黒トリュフ(アシアカロセイヨウシヨウロ)の菌に浸し、16年に美濃市内の林に植えた。土壌の酸性度などを調整し、7年目の昨年には2個発生。今年は大い物でゴルフボールほどのサイズのトリュフが12個確認された。

同研究所で同日、記者発表し、研究員の水谷和人さん(63)が成果を報告した。同席した森林総合研究所東北支所(盛岡市)の山中高史支所長(59)は、栽培の難しさについて「シイタケなどは原木の表面に菌を植えるのでコントロールしやすいが、トリュフは生きている木の根に付着させて育てるので難しく」と説明した。

研究では、土中に生息する他の菌との関係など解明されていない生態も多いといい、水谷さんは「安定栽培までにはまだいくつかステップがある。植えてから発生までの期間を短くすることや再現性の向上など技術開発に努めていきたい」と話した。(榊原あやな)

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期限:令和8年1月27日

この記事は岐阜新聞社の許可を得て使用しています。